

——夢を、見ていた。

一番星を掴もうとするような、遠い輝きを信じていた。

「……………ガ、ユーガ！」

肩を叩かれて意識を引き戻す。視線だけを動かすと、隣で親友が心配げに見ていた。

「ぼーっとしとったで。大丈夫か？」

「ん……ああ、平気」

「無理するなよ。ここんこレース続きやろ」

うん、と頷きながら手元に視線を落とした。栄養補給用の恐ろしく不味いゼリー飲料のパックを持って余すように眺めていると、隣のユースケが「なあ」と声をかけてくる。

また視線だけを向けた。とうに自分の分を飲み終えたらしいユースケの右手には綺麗に丸められたパックが収まっていた。

「確かにお前は、散々出来が悪い出来が悪い言われてきた俺らの世代にとって、希望の出世頭やけど。」

……頼ってほしい言うたら、俺らのワガママか？」

「……………そんなこと」

あらへんよ、と小さく返した。

本当に、そんなことはない。ユースケたちはいつだって自分にとって支えで、誇りで、一緒に大きなものに向かっていきたい存在だった。

だからたぶん、ただ自分が、うまく前に進めないだけなのだ。

「……………ユースケ達のことは、大事や。ずっと」

言葉を選ぶのが酷く難しい。どうにか絞り出した答えが、恐らくいま親友が求めている類ではなかったのも、分かっている。

大きなレースに出してもらえることが増えてきた。

君になら、と性能の良い艦を託されることもある。良い先輩にも恵まれた。自分はきっと宇宙船レースをするためにこの宇宙にいるのだと思っている。

けれど、どうにもならない重みがいつからか胸の内に巣食っていた。下ろす場所も、方法も、抱えていくならどうしたら良いのかもわからない。ただ「俺はこの人たちを裏切りたくない」という使命感ばかりが増していく。

「……………な、ユーガ」

ユースケの手が背中に添えられる。

「隣やったり、……後ろやったりするかもしれんけど。俺らはいつだって一緒に闘ってるつもりや」

とんとん、と指先が背を叩く。訓練生の頃から何度こうして、彼に支えられてきただろうか。

「俺らが、みんながお前を信じてるように。お前も俺らを信じてくれたら、嬉しい。」

背負い過ぎるなて、U-1さんにも言われたんやろ？」

ユースケが笑った。色々なことが目まぐるしく変わり続けるこの宇宙で、変わらずにいてくれるものの1つが彼の優しさで、彼との友情だった。

「お前になんかあったら俺が助けたる。俺が困ったらお前が助けてくれ。それでええ」

「……………ユースケ」

随分と迷って。

それから、ようやく小さく頷いた自分に親友がまた笑った。その笑みを、何故だか長いこと覚えていた。

今は遠い、彼方の日々。レースがただのレースであった頃の、ささやかで——自分にとってかけがえのない、数分のことだ。

〈……………ガさん、ユーガさん？〉

呼び掛ける音声に意識が浮上する。瞼をこじ開けてすぐ、自分がコックピットにいることを認識した。

「リバティアイランド」

〈起こしてごめんなさい。もうすぐ目的地に着きますから〉

まだ仮眠を続けますか？と問うてくる愛機には否を返す。着陸は自動操縦モードで任せられるが、ユーガはいつも自分の手で行っていた。

「今度は長い旅になってもうたな。入渠したら、メンテナンスと燃料補給を急ぎで依頼する」

〈ありがとうございます！ユーガさんもゆっくり休んでくださいね〉

リバティは行き先も終わりも決まっていない旅にずっと付き合ってくれている。

まだ幼い少女のような声で意思を伝えてくるこの愛機だけは、旅のなかで大事にしてやらなければと決めていた。

〈次の星は平和なところですか？〉

「どうやら。前のところよりは中央域に近いけど、相変わらず保安官も寄りつかん宙域や。いざってときのツテはあるにはあるけど」

〈私、ああいった星々のことはサンデーにいた頃は知りませんでした。入力されたデータにありませんでしたから〉

リバティアイランドは期待の新規艦として建造された経緯を持つ宇宙船だ。

他の艦がそうであるように、ロールアウトに当たって彼女にはこの宇宙を駆けるための膨大なデータが取り込まれたが、サンデーキングダムが手を広げるつもりのない辺境の情勢などは当然与えられなかった。

「……まあ、無くて支障のない情報やからな」

〈そうですか？私は、有する意味のあるデータ群だと思います〉

着陸地勢への移行を推奨します、とアナウンスしながらリバティが異議を唱えた。メインモニターにはこれから訪れる衛星都市が映っている。

姿勢を正し、手綱を握り直しながらユーガは愛機に続きを促した。

〈だって、ドゥラメンテ号の収集し得なかったデータです〉

「……ああ」

〈あの事故でマスターデータが失われてしまった以上、私の弟や妹はもう増えません。そして、ヒトは私たちにドゥラメンテ号の続きを求めていると認識しています〉

だがそれは不可能な話だ。

どれほど後継機をつくっても姉妹艦を駆使しても、この宇宙で1度喪われた艦は戻らない。未だ誰も覆せない不文律。

〈タイトルホルダー号やスターズオンアース号がそうしているように、私はレースに出ます。勝ってみせます。宇宙戦も従います。〉

でも、こうして旅をすることも楽しいです。

ドゥラメンテの空白を私たちが多様に埋めていくことは、ヒトの望みから外れるでしょうか〉

積み重ねていくものとその手法に正否の判断を下すには、ヒトも艦も時間が足りなさすぎる。

幼さの残る音声でそう語る愛機の名を、ユーガは掠れた声で呼んだ。

「……リバティアイランド」

〈価値がない、と断定できる物事はこの宇宙にさほど無いと私は予測します、ユーガさん。私をこの旅に選んでくれた貴方への信頼を込めた演算結果です。〉

……ヒトはいつも何かを期待する生き物なんですね〉

愛機の音声は穏やかだった。

艦は安全に着陸しつつある。宇宙船ドッグに入渠し、メンテナンスに細かく注文を入れている間、ユーガはひとり思い出す。

—夢を、見ていたのだ。

未来はきっと美しいもので、自分は大切な人たちと歩いていけると心から信じていた。

サンデーキングダム支給のパイロットスーツが最新型だったことは幸いだった。宙陸両用を追求したスーツは長旅にもよく適応している。

スーツはそのままに外套を羽織り、顔の上半分をマスクで覆う。旅に出てから人目につくところではユーガはこのスタイルを貫いていた。

レジスタンスの中心メンバーの1人として、あるいはサンデーキングダムの新たな中枢戦力として活動したユーガの名前や顔は、どこでどう受け止められるか分からない。避けられるトラブルは排除したかった。

「食料を調達したら一度戻ってくる」

〈いつてらっしゃい、ユーガさん。危ないことをしないでくださいね。いつでも戻ってきてください〉

身支度を整え、燃料補給中の愛機に声をかける。前の星でのことを気にしてか、しきりに主を心配する彼女の鼻先を幾度か撫でてやってから、ユーガは宇宙船ドッグを後にした。

少し移動すれば繁華街に着く。この寂れた衛星都市で最も大きな街だという。人も物資も情報もドッグ周辺に片寄るのは、辺境ではよくあることだ。そして様々な事情を抱えた者が流れ着いては消える場所では、仮面程度を気にかける者は少ない。

変装の発想元になった兄弟は元気にしているだろうか。

目星をつけた店で携帯食料を補充しながら、ユーガは少しだけかつての仲間を想った。

三宗教が巻き起こした対立は少し前に中央の方で無事収束したと耳にした。1度会ったあとの彼らがあれから巻き込まれていなければ良い。

一族の魅了体質である程度どうにかできるとはいえ、安全に旅をしていてくれるならそれが至上だ。

それとももう、ノリと再会して戻っただろうか。そうであれば喜ばしい。

「……お兄さん、宇宙船乗りかい？」

「ああ」

購入した品をリュックに詰め込んでいると、不意に店員の老婆が話しかけてくる。外套から覗くパイロットスーツに気付いたのは目敏いと思った。

「……………そうかい」

手を止めて老婆を見る。何かを言いたげにしながら、躊躇うように視線をそらされた。

「何か」

「……いや……………なにも……忘れておくれ」

ユーガは無言で目を細めた。老婆から悪意は感じない。だが怯えのような感情があるようには見受けられた。

そこで、不意に周囲からの視線に気づいた。周りの店からも、店員や客がちらちらとユーガの様子をうかがっている。

—警戒されている。

素性がバレたか、そもそもライダーが歓迎されていないのか。

危ないことはとお願いしてきた乗艦が思い浮かんで、ユーガは小さくため息をついた。このところ出発の度に心配をかけている自覚はあるのだ。さっさと彼女のところに戻るべきだろう。

リュックの口を閉めて肩に担ぐ。街を離れるべく踵を返そうとしたところで、ドッグの方角から青年が走ってきた。

「大変だ！またあいつらが入港してる！」

立ち並ぶ店が一斉にザワついた。小さな悲鳴やまたかよという声さえ漏らしながら、店員たちや居合わせた常連客が顔をしかめたり曇らせたりしている。

「何の騒ぎですか」

足を止めたユーガが尋ねると、老婆は心底弱ったという顔で口を開いた。

「無免許のライダー達だよ……不定期にやってきては、ここいらの物資を強奪していくんだ。保安官はこんなとこまで来ちゃくれないし、私たちの中に免許をもった人なんていないから……」

宇宙船の操縦には免許がいる。そしてレースに参加するとなればまた異なる資格が必要である、というのがこの宇宙の大きなルールだった。

だが、投棄された船を違法改造したり闇市から仕入れる形で乗り回している連中もいる。ユーガも中央域にいる間は知らなかったことだが、どうやら辺境ではそう珍しくないことであった。

「おうおうおう、今回も来てやったぜ～～！」

「大人しく差ししや悪いようにはしねえからよお！」

この時代にここまで典型的な連中がいて良いのか。

口から出かけた「うわ」を寸でのところで飲み込んで、ユーガは背後の老婆を庇うように一歩前へ出た。

一応はパイロットスーツに身を包んだゴロツキたちが大声であれこれと喚きたてながらやってくる。道いっぱいに広がった男たちは7人。

「そんな顔すんじゃねえよ、俺たちが来るのもこれで終いだ、喜びな！」

「……………」

「ちょっと、お兄さんっ、危ないよ……！」

無言のまま彼らの方へ歩きだしたユーガを、老婆が慌てて呼び止める。

振り返らないまま歩を進めたユーガに気づいたゴロツキ達が揃ってガンをとばしてきて、やがて彼らは道のど真ん中で向かい合った。

「なんだあ？俺らに歯向かおうってのか？」

「お仲間がいねえようだがな」

囁き立てるゴロツキ達には応えず、ユーガは端的に告げる。

「帰れ」

瞬間、男たちが殺気立つのがわかった。成り行きを見守る住人たちが怯える。

「んだと」

「免許を取るだけの甲斐性もない。正当な対価を払う常識もない。……お前らに渡せるものは此処には無い。出ていけ」

「出ていってやるっつってんだろうがよ！」

リーダー格らしい大男が叫ぶ。そうだと同調した取り巻きの1人が言葉を続けた。

「なんせ俺たちやこれから中央に出て暴れてやるんだからよ！」

——危ないことはしないでください

リバティア島の音声が脳裏に蘇る。すまん、と心中で謝罪しながらユーガはまた一歩彼らと距離を詰めた。

「宙へ上がれ」

それはライダー達にとって最大の挑発だ。

ゴロツキ達の目の色が変わる。自分よりも大柄な男たちを睨み上げて、ユーガは低い声を発した。

「規格を満たしていないスーツ。真面目に訓練を積んだとも思えない体つき。ライダーとしての矜持もない振る舞い。お前らが中央で通用する訳ないやろうが。……俺に負けたら保安官に突き出す」

お兄さん、と老婆が悲鳴を上げた。あんた危ないよ、と誰かが叫ぶ。躊躇わずに布告した。

「1vs7、16001本。受けるやろ」

「命知らずも大概にしとけよテメエ！！」

「俺たちが勝ったら艦から放り出してやる！」

勝負らしい勝負にもならないまま、レースは決着した。リバティアイランドは他の7隻を一切寄せ付けることなく宇宙を駆け、辺境で非力な人々を相手に暴れまわることによって養われたゴロツキたちの自信を砕いた。

ユーガが旅の間に得たと自覚している数少ない成果の1つに、各地域の保安組織とのコネクションがある。そうしようと決めているわけではなかったが、あちこちで狼藉者を打ちのめしては檻に突っ込んでいく内に顔見知りが増えたのだ。

諸々の処理を終えて今後を専門家に引き継ぎ、ユーガが再び街に顔を出したのは4日後のことだった。

騒ぎを起こしたことには変わらない、と報告と詫びを兼ねて店に立ち寄ったユーガをあの老婆は大はしゃぎで出迎えた。

「あんたのお陰だよ！本当にありがとうね……！」

あの仮面のお兄さんが来てくれたよ、と老婆が声を上げると、近くの店からもぞろぞろと人が出てくる。

「ああ兄ちゃん、助かったよ！」

「私たちだけじゃどうすれば良かったか……お礼はどうしたらいいんだい？」

わっと囲まれてもはや身動きが出来なくなる。人々の熱気に気圧されながら、ユーガは慌てて口を開いた。

「礼はいい。今日は騒がせた詫びと、今後の話をしに」

「お詫びなんていいのに！」

そうだそうだと人々が頷く。このままではどこかの店に担ぎ込まれそうな勢いさえ感じた。

「……あいつら以外にもこの辺りには似たような連中が多くいることがわかった。近隣の保安組織が暫くパトロール範囲を広げることになったから、何かあればこれからは通報してくれ」

住人たちを宥めながら必要なことを話す。あのゴロツキたちは余罪も多くお縄になったこと。最寄りの基地の座標と連絡先、巡回に来ることになった保安官の名前と特徴。

まずは人々に安心してもらおうと報告した事柄に、狙い通り誰も彼もが胸を撫で下ろした。

「…………お兄さん、悪いことしちゃったねえ。助けてくれたのにあたしったら最初ずいぶん余所余所しい態度とっちゃって」

あの老婆が申し訳なさそうに言い出す。頭を下げようとするのを制して、ユーガは彼女の背をぽんと撫でた。

「謝ることなんか何もない。……誰にも頼れん中で、これまでよく踏ん張られました。貴女たちは強い方々です」

せめてこれからはほんの少しでも安心して暮らしてほしい。ユーガが言葉をそう締め括ると、老婆はいよいよ感極まったように、瞳を潤ませ

「ありがとうね」

とユーガの手を握った。

周囲で見守っていた人々もまた口々にありがとうと礼を言う。

目を伏せてその感謝を受け止めたユーガがそろそろ街を発つと告げると、彼らは揃って残念そうにしながらも、なら安くするから必要なものをいっぱい買っていってくれと笑った。

「……リバティ」

〈危ないことしないでくださいと言いました〉

「すまんかった」

〈この前の怪我が治ってないの、知ってるんですからね。なのにあんなに大きくて乱暴な人たちに1人で立ち向かって。私のバイタルチェックはそんなに精度が低いと思ってますか？〉

「そうやない。……すまん」

〈いざとなれば物質透過があると思ってるでしょう！仮面兄弟の2人には魅了に頼らず護身の術を〜とか言ってた癖に！言ってた癖に！〉

愛機のコックピット内、ユーガはひたすら彼女の機嫌を取ることから次の旅を始めなければならなかった。

リバティア島の感知範囲内だったために事の経緯を全て彼女に知られていたのが良くなかった。レースで機嫌良く走ってくれただけ御の字だろう。

〈やっぱり1度大きな星に戻りましょう。こんなに端っこばかり旅をしていたらユーガさんはいつまで経っても無茶をします〉

「戻らん」

〈すぐそうやって意地張る！〉

少女の声が拗ねたように跳ねる。いいじゃないですかと駄々をこねる乗艦を宥めながら、ユーガは静かに言った。

「……………まだ、会えん」

〈そんなことないと思いますけど！！ユーガさんが弱い訳ないじゃないですか！〉

「俺がそう思えとらんからな」

〈……………もう！早く次の目的地を入力してください！〉

一旦諦めてくれたらしいリバティア島がメインモニターに近隣の宙域図を表示した。

悪い、ともう一度謝りながらユーガは次の行き先を指定する。

また遠い旅になる。次の星は自分のような流れ者のライダーが多く立ち寄る星だという。何かを掴めないかと期待する気持ちはあった。

〈ユーガさん〉

離陸を始めながらリバティが話しかけてくる。いつものように促すと、まだ建造から年月の浅く希望に溢れた彼女は機嫌を直して、どこか弾んだ声で言った。

〈次の星はどんなところでしょうか？良いことはありそうですか？

データ収集は任せてくださいね、私はこの旅の間にたくさん勉強するつもりなので！〉

新造艦への答えを探しながら、ユーガは手綱を握り直して視線を上げた。

モニターには黒い宇宙が広がっている。引かれ合い反発し合う星々が転々と散らばり、瞬いていた。ユーガの進む先はいま見えているそれらよりも遥か向こうだ。

かつていた場所も今は遠い。

あそこで努力を重ね、正義を成し、日々を賑やかに生き抜いていた仲間たちが今この瞬間も穏やかで在ってくれば良い。彼らの仰ぐ宙が美しいものであるように、いつも祈っている。

そこから道を外したのは自分だけだ。

いつになるか分からない日であっても、彼らと共に在った自分のことを許してやりたいと、願っている。

〈大丈夫です。きっと私たちはどこまでだって行けるし、どこにだって帰れますよ。ね、ユーガさん〉

「……………ああ。そうやと、いいな」

—夢を、見ている。

自分がどこにいるのかも、どこへ行くのかも分からなくなっても、一番星を探している。

過ぎた日々を照らしてくれていた光をまだ覚えているから、自ら手放したそれを追いかけて。

この荷物を背負ったまま、彷徨っている。

「仮面の凄腕ライダー？そりゃ2人組かい？違う？じゃあ宝塚トップスター仮面とキャロット仮面じゃないな」  
「なんだ兄ちゃん、外に詳しいのかい」  
「そりゃ俺は輸送船乗りだからね、あちこち旅して色んな話を小耳に挟むのさ。そのライダー、名乗らなかったのか」  
「そうなんだよ。名乗るものじゃないって言うばっかで」  
「うーん、じゃあちょっと正体は難しいな……………イケケンXとかいう新顔は特徴が合わないし……………いや待てよ？小柄で、パイロットスーツに外套羽織ってて、それで仮面だろ？」  
「おっ、なんだいなんだい、やっぱ心当たりがあるんだね？」  
「ぜひ教えてくれよ、恩人のこと何も知らないのは申し訳ないじゃねえか」  
「あくまで噂、噂だぜ？」  
「前置きはいいいから早く」  
「わかったよ。ええと、気を悪くするなよ、ここみたいな辺境をな、あっちこっちフラフラ彷徨っては荒くれ共をのしたり、困り事に手を貸してくれたり、そういうことをしてる男がいるって、そんな話を聞いたことがあるんだよ」  
「あのお兄さんっぽいね」  
「確かになあ。でもそんな風に言われると、なんだか大英雄様みたいだな」  
「おっちゃんもそう思うかい？でもよ、これまた噂だが、ある星でそう言われた男は『自分なんかそんな伝説と並べちゃいけない』って」  
「…………でも、助けられた人たちが大勢いるんだろう？あたしらみたいにさ」  
「大勢かどうかは知らんが、まあこの広いユニヴァースで噂の種になる程度にはいるさね。……………それで、英雄様じゃないなら呼び名をつけちまえば良いってんで、一部ではこう呼ばれてんのさ」

「ネオユニヴァースの新たな"旅人"だってね」

ケイバ・ネオユニヴァース エクストラストーリー  
極夜と憧憬と